

金沢市近郊河川の河川空間に対する住民意識調査

金沢大学工学部 正 員 高瀬信忠
 金沢大学工学部 正 員 宇治橋康行
 東京建物 安久豊司
 金沢大学工学部 学 生 〇望月 真

1. はじめに

近年、我が国では、河川に対して従来の治水、利水に加え、親水機能が注目されている。親水機能を新しく取り入れた河川空間の整備を行う場合、水辺周辺の住民の意識や要求を詳細に検討することが重要であると考えられる。本研究では、金沢市及び近郊の5河川（犀川・浅野川・伏見川・金腐川・手取川）において、主に河川のイメージ、河川空間の整備状況および親水活動に関する住民アンケートを行い、その結果を統計的に分析し、住民の河川に対する意識の実態を分析した。ここでは、金沢市街地を貫流する犀川、浅野川の分析結果を中心に述べる。

2. アンケート調査概要

今回の調査は、平成2年9月4日から6日にかけて行い、配布郵送法を用いた。調査対象者は、各河川の対象地域を上流から下流まで町単位に地区分けし、各地区から5世帯を無作為抽出した。犀川、浅野川のアンケート配布数はそれぞれ140、120、回収率は犀川69.3%、浅野川73.3%そして全体では68.9%であった。

3. アンケート調査の結果及び考察

まず、「河川の全体的イメージ」についての調査結果を図1に示す。犀川は、豊かな自然、広々とした見晴らしといった良いイメージが多く、散歩道としての役割も大きいことが分かる。浅野川は豊かな自然、古い歴史のある川といった良いイメージが多い一方で、25%の人が汚い川というイメージを持ち、今後河川の浄化が課題であると考えられる。次に「種々の評価尺度から見た河川のイメージ」についての調査結果を図2に示す。犀川について見ると、市の中心部を貫流するため都会的、近代的というイメージが他の河川より多く、ほとんど全ての尺度で良いイメージが持たれ、今回調査した5河川の中で最も良いイメージが持たれている。浅野川は、5河川全体の平均に似た傾向にあり、日本的で静かな河川というイメージが持たれ、これは浅野川の歴史的行事等によるものと考えられる。また一方で、未利用、水質が悪いというイメージも持たれている。

次に、SD法により20対の評価尺度の相関行列を求め、因子分析法により5つの因子軸を求めた。これらの因子軸には、寄与度の高い順に快適性、危険性、静寂性、個性、親密性と名付けた。これらの因子のうち重要度の高い快適性、危険性の2因子に注目し、地区別の河川のイメージの差を表したものが図3、図4である。28地区に分けた犀川は、下流部で水質に対するイメージが悪く、これは流れが緩やかなために、汚濁物が溜りやすい状況にあるためと考えられる。危険性に関するイメージは全体的に良く、住民は治水面に不安を持っていないようである。これは、犀川では河川改修が進んでいることと、最近大きな出水が無いことに関連していると思われる。24地区に分けた浅野川は、中流部から下流部にかけて水質が悪いというイメージが多く、特に中流部は住宅が河川に密接しており、ここから出されるゴミ等が原因であると考えられる。危険性については、上流部でイメージが悪くなっている。今後、浅野川は上流部の治水整備、中流部での総合的な整備が求められていると考えられる。最後に「今後期待される河川整備」についての調査結果を図5に示す。このことから、住民が、治水、利水面よりも、むしろ水質、親水、景観面での整備を期待していることが分かる。

4. おわりに

本研究で得られた結果を要約すると以下の通りである。①今回調査した5河川において、周辺住民は治

水面ではほぼ満足しており、今後水質、景観、親水といった環境面の整備を期待している。②SD法により河川に対する住民意識の構造を分析し、快適性、危険性、静寂性、個性、親密性の5つの因子軸を抽出した。③各地区におけるイメージの評価、親水活動に関する評価を基に、各河川の特性を明らかにした。

なお、住民意識による河川空間の評価は、今後親水機能を新しく位置づけた整備計画を策定する上で有用と考えられるが、具体的な計画に適用していくためには、環境要素の詳細な状況と住民意識による評価との関連を検討していく必要がある。

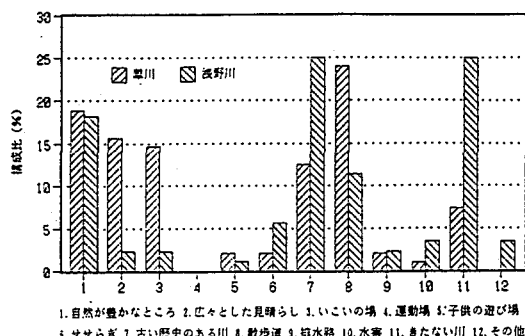


図-1 河川の全体的イメージ

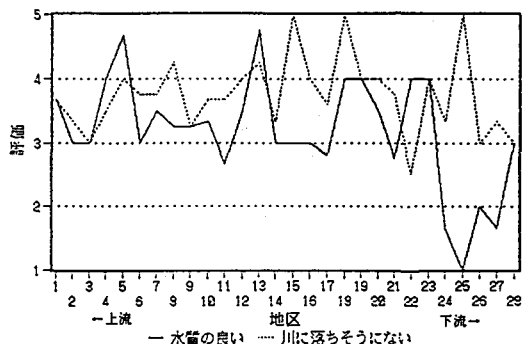


図-3 犀川の地区別イメージ

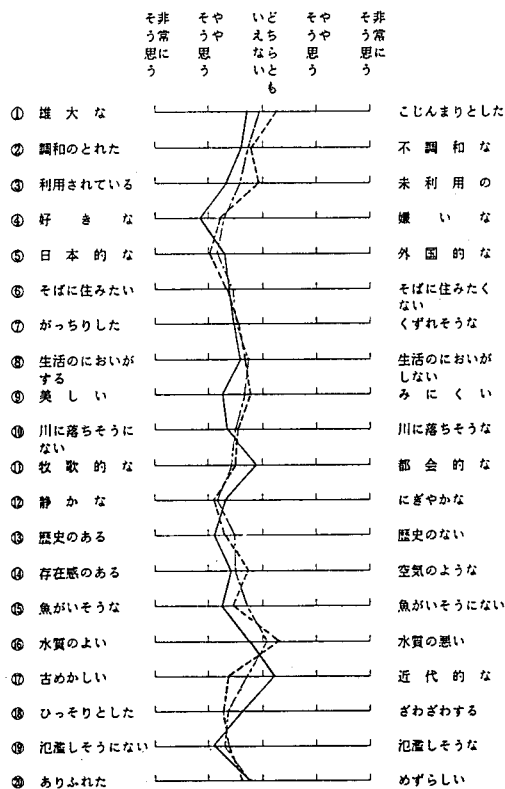


図-2 各イメージ評価尺度の平均値

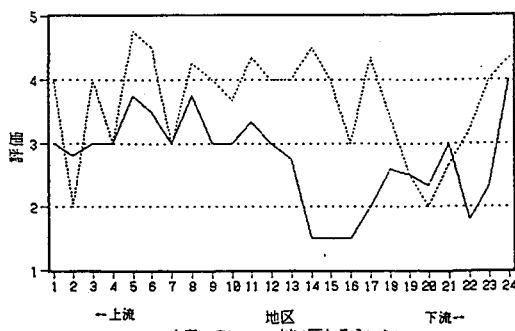


図-4 浅野川の地区別イメージ

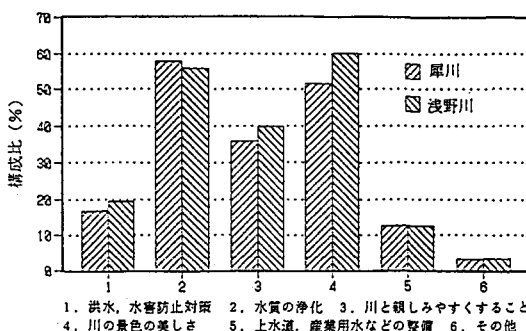


図-5 今後期待される河川整備